

# 「ダーウィン」を読む

2009 年は『種の起原』出版(1859.11.24)から 150 年、ダーウィン(Charles Robert Darwin, 1809.2.12-1882.4.19)の生誕 200 年の記念すべき年で、世界各地でイベントが催された。イギリスではダーウィンの伝記映画“Creation” (ジョン・アミエル監督、ポール・ベタニー、ジェニファー・コネリー共演)が 9 月に公開されたが、米国では上映禁止となったと報道されている。この映画の原作は、『ダーウィンと家族の絆』<sup>10)</sup> であり、原作者のランドル・ケインズさんはチャールズ・ダーウィンの玄孫(孫の孫)だという。昨年 2008 年、「ダーウィン展」が東京と大阪で開催されたが、その図録には「ダーウィンの子孫」として彼女の父リチャード・ダーウィン・ケインズ氏のメッセージが掲載されていた。チャールズ・ダーウィンの二男ジョージの二女マーガレットは、経済学者ジョン・メイナード・ケインズ(John Maynard Keynes, 1883-1946)の弟のジェフリー・ケインズと結婚。ここで、ダーウィン家とケインズ家が親戚になったのである。

ダーウィンに関する本は、ダーウィン産業(Darwin Industry)という言葉があるほど商売になるらしく、あまりに多くすべてを挙げることは不可能である。筆者が今まで買ってきたダーウィンや進化論の本も 100 冊をはるかに超えている。ダーウィン没後の「進化論」の展開と現代の進化学説に関する本は別に取り上げることとし、ここでは、ダーウィン以前とダーウィン前後についての書籍のみを紹介する。

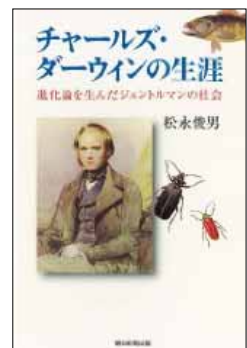
## ダーウィン以前の進化論

進化論の先駆者と言われているのは、チャールズ・ダーウィンの父方の祖父で『ズーノミア』<sup>1)</sup>を著した医師で博物学者のエラズマス・ダーウィン(Erasmus Darwin 1731-1802)と、フランスの博物学者ビュフォン(Georges-Louis Leclerc, Comte de Buffon 1707-1788)である。どちらも伝記の邦訳が出ている<sup>2)3)</sup>。ビュフォンの主著『博物誌』(1749-1778)も全図版とともに訳出されている<sup>4)</sup>。「進化論」の最初の提唱者として紹介されるのは、ビュフォンの息子の家庭教師でもあったラマルク(Jean-Baptiste Pierre Antoine de Monet, Chevalier de Lamarck, 1744-1829)である。彼の伝記<sup>5)</sup>と著書『動物哲学』(1809)の邦訳<sup>6)</sup>がある。『動物哲学』は岩波文庫からも出ているが(小泉丹ほか訳 1954)、抄訳であり読みにくい。

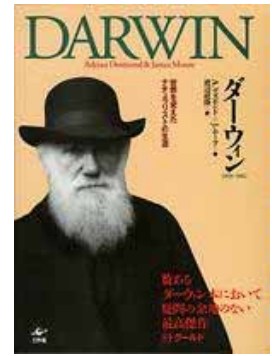
1. **Zoonomia; Or, the Laws of Organic Life**, Erasmus Darwin (1794) (Cambridge Library Collection- Life Sciences) Cambridge University Press(2009) Volume 1:616pp. Volume 2: 802pp
2. **エラズマス・ダーウィン—生命の幸福を求めた博物学者の生涯**, Desmond King Hele (著), 和田芳久(訳) (1993), 工作舎, 549pp. 6,825 円
3. **博物学者ビュフォン**, ピエール・ガスカール(著), 石木隆治(訳) (1991) 白水社 276pp.
4. **ビュフォンの博物誌—全自然図譜と進化論の萌芽** 『一般と個別の博物誌』ソニーニ版より, ビュフォン(著), ベカエール直美(訳) (1991) 工作舎, 336pp. 12,600 円
5. **ラマルク伝—忘れられた進化論の先駆者** (平凡社自然叢書) イヴ・ドゥランジュ(著) ベカエール直美(翻訳) (1989), 平凡社, 255pp.
6. **ラマルク—動物哲学** (科学の名著)ラマルク(著), 高橋達明(訳) (1988) 朝日出版社 489pp.

## ダーウィンの伝記とその時代

ダーウィンを知る本としてオススメなのは、日本のダーウィン研究の第一人者である松永俊男氏がわかりやすく 1 冊にまとめたもの<sup>7)</sup>と、進化学者の長谷川眞理子氏の新書<sup>8)</sup>であろう。この 2 冊で入門編としては十分である。しかし、物足りないと思うなら、辞書並みの厚さを誇る長編の伝記<sup>9)</sup>もある。この伝記は発刊当時非常に高い評価を受け話題となった。チャールズの母方の祖父は陶芸家で陶磁器メーカー Wedgwood の創業者ジョサイア・ウェッジウッド(Josiah Wedgwood 1730-1795)であり、ダーウィンの妻エマ Emma もウェッジウッド家の娘でいとこにあたる。ダーウィンが進化に関する考えを公表することを躊躇した原因の一つに、敬虔なキリスト教徒である



妻への配慮があったとも言われている。「進化論」はキリスト教の教義と矛盾するのである。ダーウィンには子供が 10 人(六男四女)いたが、長女アニーが 10 歳の若さでなくなったとき、家族は深い悲しみに陥り、チャールズもなかなか立ち直れなかった。この時の様子を書いたものが、『ダーウィンと家族の絆』<sup>10)</sup>である。日本流に言えば「神も仏もないものだ」とチャールズは神に対する疑問を深めたという。この点の描写が映画”Creation”の米国での上映禁止の理由となっているようだ。ダーウィン自身の『自伝』も伝わっているが、死後に出版されたものは三男フランシスが家族に関する部分をとことろ削除してあった。これらの部分を復活させたものがノラ・バーロウ編の『自伝』<sup>11)</sup>である。ボーラーの本<sup>12)</sup>も参考にすると良い。最近出た「オックスフォード科学の肖像」シリーズにも「ダーウィン」<sup>13)</sup>があるが、やや物足りないであろう。

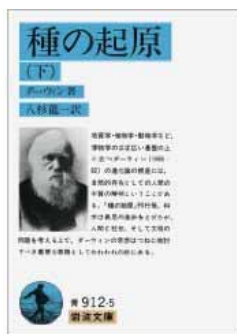


ダーウィンを理解するためには、ビクトリア時代のイギリスの社会や文化を知る必要があるが、この点については、松永氏の著作<sup>14)-16)</sup>で十分であろう。『種の起原』の 15 年も前に出版業者のロバート・チェンバースが匿名で *Vestiges of the Natural History of Creation* 『創造の自然史の痕跡』<sup>16)</sup>を世に出し、「生物は変わっていく」という考えは水面下で浸透していたようだ。この辺のところは高校の教科書では登場しないが、業界では周知のことである。残念ながら”Vestiges”の邦訳は出ていないが、出ても売れるとは思えない。

7. **チャールズ・ダーウィンの生涯** 進化論を生んだジェントルマンの社会(朝日選書), 松永俊男 (2009) 朝日新聞出版 331pp. 1,470 円
8. **ダーウィンの足跡を訪ねて** (集英社新書) 長谷川真理子 (2006) 集英社 205pp. 998 円
9. **ダーウィン—世界を変えたナチュラリストの生涯** Adrian Desmond, James Moore(著), 渡辺政隆(訳) (1999) 工作舎 (2冊組) 1042pp 18,900 円
10. **ダーウィンと家族の絆—長女アニーとその早すぎる死が進化論を生んだ**, Randal Keynes(著), 渡辺政隆, 松下展子(訳)(2003) 白日社 627pp. 3,990 円 原題は *Annie's Box : Charles Darwin, his Daughter and Human Evolution* (Forth Estate, London, 2001)
11. **ダーウィン自伝** (筑摩叢書) Charles R. Darwin、ノラ・バーロウ編, 八杉竜一, 江上生子(訳) (1972 年) 筑摩書房, 264pp
12. **チャールズ・ダーウィン 生涯・学説・その影響** (朝日選書) Peter J. Bowler、横山輝雄(訳)(1997) 朝日新聞社 320pp. 1,785 円
13. **ダーウィン—世界を揺るがした進化の革命** (オックスフォード科学の肖像) Rebecca Steffoff, Owen Gingerich (著), 西田美緒子(訳) (2007) 大月書店 159pp. 1,890 円
14. **ダーウィンの時代—科学と宗教**, 松永俊男(1996) 名古屋大学出版会 406pp. 3,990 円
15. **ダーウィンをめぐる人々** (朝日選書 343) 松永俊男(1987) 朝日新聞社, 241pp. 966 円
16. **ダーウィン前夜の進化論争**, 松永俊男(2005) 名古屋大学出版会, 280pp. 4,410 円
17. **Vestiges of the Natural History of Creation**, Robert Chambers(1844) ,Cosimo Classics (2007) 216pp. 『痕跡』への批判に対する説明として出版された“Explanation”『釈明』や当時の書評等を Secord がまとめた Univ of Chicago Press 版(1994) 770pp. もある。

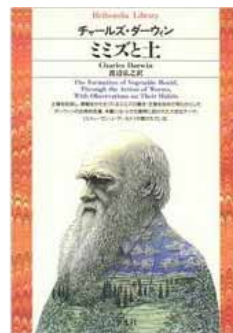
## ダーウィンの著作とそれに関する本

ダーウィンの著作は <http://darwin-online.org.uk/index.html> ですべて読むことができる。日本でも、「ダーウィン全集」が企画され、白揚社版 (1938-1940) と改造社版 (1948-1950, 白揚社版と同じものも含む) が出版されたが、いずれも未完に終わった。生誕 200 年の 2009 年に全巻刊行をめざして 1999 年からスタートした文一総合出版の著作集も現在 3 巻までで頓挫している。最も重要なものはもちろん *The Origin of Species* 『種の起原』であるが、1896 年以降 15 回も邦訳されてきた。なかには、大杉榮譯 (ダキソ 『種の起原』 1914) などというものもある。現在、最も入手しやすいものは岩波文庫<sup>18)</sup>のものであるが、今年 9 月に光文社からも読みやすい新訳<sup>19)</sup> (上巻) が出ている (下巻は 12 月発売予定)。両者ともに初版(1859)の訳である。原典 (英語) を読みたいというなら、ペーパーバック<sup>20)</sup>もいくつか



出ているが、最終版の第6版が多いようだ。日本語の第6版の訳<sup>21)</sup>もある。初版のタイトルは、*On the origin of species by means of natural selection, or the preservation of favoured races in the struggle for life* と実は非常に長い。第6版では始めの”On”がカットされている。実はこのことはかなり重要な意味をもつ。『種の起原』は人類の歴史上最も重要な著作に挙げられるが、タイトル通りの内容が書かれているわけではなく、実際に読むとあまり面白いものではない。そこで、解釈本が何度も出されてきた。リーキー編<sup>22)</sup>は原著にない図を取り入れ、解説本の定番となっていた。さらに最近も複数登場している<sup>23) 24)</sup>。

文一総合出版の「全集」は前の2回と同様に立ち消えになる雰囲気であるが、別巻1<sup>25)</sup>は必読に値する。日本の第一線で活躍する進化学者が集まってダーウィンの現代的意味を論考している。『種の起原』にかくれて目立たない存在であるが、『人間の進化と性淘汰』<sup>26) 27)</sup>もダーウィンの考えを知るのに必須である。「性淘汰」は「なんで、あんなに目立つ極彩色の鳥が生き残ることができたのか」という問いに対するダーウィンの考えで、「自然選択説」と並ぶ大きな柱である。文一総合出版の著作集で最初にこの本が取り上げられているのは、編集者の意気込みをうかがい知ることができる。これも、原書<sup>28)</sup>で読むことができる。「文一」では、次に『植物の受精』<sup>29)</sup>が出ている。植物に関する著作では『よじのぼり植物』<sup>30)</sup>と『植物の運動力』<sup>31)</sup>も最近の邦訳がある。この翻訳が出た翌年の大学入試では、この分野の出題が明らかに増えた。ダーウィンの最後の著作がミミズに関するものであることはあまり知られていない。『ミミズと土』<sup>32)</sup>では「遺跡が土に埋もれてくるのはミミズが原因」とされており、ダーウィンは庭の石が少しずつ埋もれていく様子を実際に観察している。残念ながら几帳面な執事によって石が片付けられて実験は終わってしまうのだが……。ミミズに関しては、わかりやすく楽しめる絵本<sup>33)</sup>も出ている。ダーウィンは『種の起原』出版前に十年以上にわたって蔓脚類（フジツボやカメノテ）の分類にも取り組んだ。これに関する本<sup>34)</sup>も最近出た。



ダーウィンの著作で最も読みやすく面白いのは、何と言っても『ビーグル号航海記』*Voyage of the Beagle* であろう。ダーウィンが22歳の時に測量船ビーグル号に乗り込んで南アメリカやガラパゴス諸島などを訪れた5年余りの航海の記録である。原書<sup>35)</sup>はいくつかの版が入手可能であるが、邦訳版<sup>36)</sup>が現在絶版となっているのはまことに残念である。ところで、ダーウィンが乗船したビーグル号は保存されていないが、船首部分が愛知県岡崎市の博物館に保存されているという話が岩波文庫版に紹介されていた。ビーグル号はクリミア戦争で使用された後、幕末の島津藩に払い下げられて「乾行」と名付けられたというのである。実は「ビーグル号」という船は何隻もあり「同名異船」だったのであるが、この話はつい最近までまことしやかに伝えられていた。

18. 種の起原〈上・下〉(岩波文庫) Charles R. Darwin, 八杉龍一(訳) (1990) 上・446pp. 下・408pp. 岩波書店 上・下とも各903円 初版の全訳
19. 種の起源〈上〉(光文社古典新訳文庫) Charles R. Darwin, 渡辺政隆(訳) (2009) 光文社 423pp. 880円 初版の全訳
20. *The Origin of Species* (Wordsworth Collection), Charles Darwin (1872) (6<sup>th</sup> ed), New edition 版 (1998) Wordsworth Editions Ltd 416pp. 655円 『種の起原』第六版
21. 種の起源 Charles Darwin, 堀伸夫・堀大才(訳) (2009) 朝倉書店 488pp. 6版の訳 5,040円
22. 新版・図説 種の起源, Charles Darwin, Richard Leakey(編), 吉岡晶子(訳) (1997) 東京書籍 350pp. 5,040円
23. ダーウィンの『種の起源』(名著誕生) Janet Browne、長谷川真理子 (2007) ポプラ社 203pp. 1,575円
24. ダーウィン『種の起源』を読む, 北村 雄一(2009) 化学同人 301pp. 2,100円
25. ダーウィン著作集〈別巻1〉現代によみがえるダーウィン, 長谷川真理子, 矢原徹一, 三 中信宏(1999) 文一総合出版 263pp. 2,940円
26. ダーウィン著作集〈1〉人間の進化と性淘汰 *The descent of man and selection in relation to sex* (1) Charles R. Darwin(1871)、長谷川真理子(訳) (1999) 文一総合出版 258pp. 3,990円

27. ダーウィン著作集〈2〉人間の進化と性淘汰(2) Charles R. Darwin、長谷川真理子(訳)(2000) 文一総合出版 549pp.
28. **The Descent of Man** (Penguin Classics) Charles Darwin(1871) (著), James Moore (寄稿), Adrian Desmond (寄稿)(2004), Penguin; Reprint 版, 864pp. 1,432 円
29. ダーウィン著作集〈3〉植物の受精, The effects of cross and self fertilisation in the vegetable kingdom, Charles R. Darwin(1876), 矢原徹一(訳)(2000) 文一総合出版 446pp. 5,775 円
30. よじのぼり植物—その運動と習性 The movements and habits of climbing plants, Charles Darwin (1865), 渡辺 仁(訳)(1991) 森北出版, 160pp. 3,360 円
31. 植物の運動力 The power of movement in plants, Charles Darwin(1880), 渡辺 仁(訳)(1987) 森北出版 499pp. 12,600 円
32. ミミズと土 The formation of vegetable mould, through the action of worms (平凡社ライブラリー) Charles Darwin (1881), 渡辺弘之(訳)(1994) 平凡社, 317pp. 1,223 円
33. ダーウィンのミミズの研究, 新妻昭夫 杉田比呂美(2000) 福音館書店 40pp. 1,365 円
34. **Darwin and the Barnacle**『ダーウィンと蔓脚類』Rebecca Stott (2003), Faber and Faber, 336pp.
35. **The Voyage of the Beagle**, Charles Darwin : (Classics of World Literature) Wordsworth Editions Ltd; New edition 版 (1999) 496pp. 691 円, (Penguin Classic) (1989) 448pp. 1,319 円
36. ビーグル号航海記 上・中・下 (岩波文庫) Charles Darwin(著), 島地威雄(訳)(1961)

### ウォレスとその著作

ダーウィンと自然選択説に関わる人物としては、アルフレッド・ラッセル・ウォレス Alfred Russel Wallace(1823-1913)をまず挙げる必要がある。彼は南米や東南アジアで鳥や昆虫の採集を続け、生物が進化していくことを確信した。1858年に今のインドネシアからダーウィンに論文を送りつけてダーウィンをあわてさせた。ウォレスの原稿は1858年7月1日のロンドン・リンネ学会で、ダーウィンがフッカーに個人的に提示した小論(1847)とエイサ・グレイに宛ての手紙(1857)とともに発表された。ダーウィンは自身の考えを大部の本にすべくまとめ始めていたが、急遽抄録版である『種の起原』の作成に取りかかったのである。この辺の経緯<sup>37)</sup>やウォレスの伝記<sup>38)</sup>、ウォレスの著作<sup>40)~43)</sup>や足跡をたどる旅行記<sup>39)</sup>も邦訳されている。筆者は『マレー諸島』の原書をバリ島で入手したが、オランウータンと争う話など『ビーグル号』よりずっと面白い。



37. **ダーウィンに消された男** (朝日選書) Arnold C. Brackman、羽田節子、新妻昭夫(訳)(1997) 朝日新聞社 370pp.
38. **博物学者アルフレッド・ラッセル・ウォレスの生涯**, Peter Raby、長澤純夫、大曾根静香(訳)(2007) 新思索社 483pp. 4,725 円
39. **種の起原をもとめて—ウォレスの「マレー諸島」探検**, 新妻昭夫(1997) 朝日新聞社 403pp.
40. **熱帯の自然** (ちくま学芸文庫) Alfred R. Wallace (著), 谷田専治, 新妻昭夫(訳)(1998) 筑摩書房 379pp. ページ
41. **マレー諸島—オランウータンと極楽島の土地 The Malay Archipelago** 上・下 (ちくま学芸文庫), Alfred Russel Wallace (著), 新妻昭夫(訳)(1993) 筑摩書房.
42. **ダーウィニズム—自然淘汰説の解説とその適用例** Alfred R. Wallace (著), 長沢純夫、大曾根静香(訳)(2009) 新思索社 542pp. 4,725 円
43. **アマゾン河探検記**, Alfred R. Wallace, 長沢純夫, 大曾根静香(訳)(1998) 青土社 404pp. 2,940 円

※気がついた人も多いと思うが、本稿では『種の起原』でなく『種の起原』を用いている。初期の日本語訳では「起原」が多かったが最近では「起源」が多い。「原」の由来は「原」で水の湧き出るところの意があり、「源」の字は水が重複しているのである。「起原」で誤りではない。

**おまけ** ●**ダーウィンの悪夢** F.ザウパー監督(2004)。東アフリカのビクトリア湖はかつては多様な生物が生息していたことから“ダーウィンの箱庭”とも呼ばれていた。そこに繁殖した巨大魚ナイルパーチをめぐるドキュメンタリー映画。映画で臭いも再現できるなら、腐った魚の悪臭で吐き気をもよおすだけでなく、発生したアンモニアで窒息死の危険すらある。でもその魚肉の多くが日本に来るのだ。映画館で観て一見の価値は十分あると思うが、再び観ようとは思わない強烈な映画である。

※やや古い本もあります。図書館になければ生物室・西郷まで。

2009.11.4 西郷 孝